



あの日、未来は明るかった一。
 慌ただしくもほっこりと、
 現代人の郷愁を誘う
 “昭和30年代のマスカルチャー”

鉄の手裏剣

Iron ninja stars

昭和37年(1962)、国産ヒーロー物第1号の『月光仮面』で一躍全国のアイドルとなった大瀬康一が、三たび主演した『隠密剣士』をきっかけに忍者ブームが巻き起こった。そこから『忍者部隊月光』、『風のフジ丸』といったマンガが生まれ、アニメやドラマ化もされて、忍者物は各社のドル箱となった。関連本の出版も相次ぎ、奥深い忍者の世界は時を経て現代っ子たちを魅了していった。

風呂敷を身にまとい、オモチャの刀を刃を下にして差し(忍者は下から逆手で切り上げるため、武士とは逆にこう差し)、屋根の上を駆け回る忍者ごっこが流行し僕も熱中した。落ちてケガをする者もいたが、『月光仮面』の時のような大騒ぎ(月光仮面ごっこで足を骨折する子どもが続出した)にまでは至らなかった。

さまざまなグッズも売り出され、中でも忍者が投げる手裏剣に人気が集中した。しかし、オモチャ屋や駄菓子屋で売っているプラスチック製の物や月刊マンガ雑誌の付録の紙製の手裏剣は軽くてあまり飛ばず、第一迫力がない。

しかしある時、別の月刊マンガ誌の通販広告の和文タイプライターの横に、鉄製手裏剣があるのが目に飛び込んできた。ぜひ手に入れたいと思ったが、現金書留など出したことはないし、所在地の神田神保町は子ども一人で行くには遠過ぎる。それに、金だけ取って商品を送ってこない悪徳通販業者もあると聞いていた。

そこで、一計を案じた。じいさんだ。祖父は昔の人間らしく神保町の三省堂がごひいきで、時々本を買いに出掛け、僕も何度か連れて行かれたことがあった。勉強に使うとか何とかうまいこと言って和文タイプライターを前面に立て、ドサクサに紛れて手裏剣を手に入れようと目論(もくろ)んだ。

作戦は図に当たり、その機会は意外に早く訪れた。予想に反し、祖父は通販会社の方へ先に連れて行ってくれた。順番を逆にすると、僕にせかされて三省堂で本がゆっくり見られないと思ったのだろう。その店は、三省堂のすぐそばの古いビルの一室にあった。東南アジア系のような風貌の事務服を着たおじさんが、僕らにタイプライターの実演をして見せた。思ったより小さかったが、プレスされた薄い鉄板がグレーに塗られ、いかにも事務用品らしい外観をしている。上部の丸いゴム版の縁に「いろは」の文字が突き出し、それをレバーで1字ずつ拾って打つ。とても『スーパーマン』のクラーク・ケントのように「タ、タ、タ」とは打てない。まっ、千円前後だからこんなものだろう。

「手裏剣もありましたよね？」満を持して尋ねると、おじさんは奥から銀色の十字型手裏剣と棒手裏剣がいっぱい詰まった箱を持ってきた。「これもいい?」。僕は、祖父の顔のぞき込んだ。「ああ。良かった!でも、あまり喜んだ素振りを見せてはいけない。こっちは、あくまでもおまけなのだ。手にすると、やはりそれなりの重さがある。1ミリ強くらいの鉄板をくり抜いた物で、もちろん刃は付いていない。こちらも想像より小ぶりだったが、どちらも1枚20円では致し方ない。欲を出して元も子もなくなってしまうので、十字を10枚、棒手裏剣を5枚だけ買ってもらった。

僕は有頂天になり、三省堂でもあまり時間は気にならなかった。まだ三省堂が木造のころで、2階のグリルに寄るのが恒例のコースになっていた。いつもいる年配の店員さんは実に感じがいい。医者や大会社の重役のような風情で、今考えれば定年後の二次就職だったのかもしれない。しかし、腰が低く子どもにも親切に接して、いかにも楽しそうだ。こんなに楽しそうに働く人には、それまでもそれ以後も会ったことはない。この時も僕のうれしそうな様子を見



て、よかったね、というように大きくほほ笑んでくれた。

近所の大学生のお兄さんは、ブームが起きる前から手裏剣遊びをやっていたらしい。

列車事故

昭和37年(1962)5月に常磐線・三河島駅構内で起きた「三河島事故」と、翌年11月に起きた「鶴見事故」、いずれも脱線多重衝突事故で約160名の犠牲者を出しており、「国鉄戦後5大事故」に含まれている。

鶴見事故

昭和38年(1963)11月9日、横浜市鶴見区の踏切付近で起こった、東海道本線列車の脱線多重衝突事故。まず、脱線事故を起こした貨物列車の車両が隣の東海道本線上り列車の線路を遮り、そこへ高速で侵入した上り列車が衝突。上り列車の先頭車両は下り線側にはじき出され、そのとき同時に走行していた下り列車の側面に激しく衝突した。結果、上下線ともに車両が大破する大惨事となった。死者の合計は161名に上り、「国鉄戦後5大事故」の一つに数えられる。

戦後最大の産業事故

鶴見事故と同じ日、福岡の三井三池炭鉱三川坑で、死者458名、一酸化炭素中毒患者839名を出す甚大な粉塵爆発事故(三井三池三川炭鉱粉塵爆発)が起きた。保安体制の不備が原因となり、救助の遅れが犠牲者を増やしたといわれている。

石原裕次郎の『錆びたナイフ』（1957）という映画や唄が流は行やったから、手裏剣もナイフ感覚だったのかもしれない。長いクギを線路に置いて電車を踏ませるとちょうどいいのができる。でも、絶対真似するなよ、ときつく言われた。言われるまでもない。三河島と鶴見で立て続けに大きな**列車事故**が起き、合わせて300人以上の死者が出ていたころだ。

さっそく僕は、道路に手裏剣をこすり付けてとがらせることを考えた。近所の同じ手裏剣を持っている奴も加わった。缶詰めのふたを切って代用している奴もいて、皆で電柱を的に投げっこをした。電柱がまだ木製だったから、これほど格好な標的はない。だが、棒手裏剣は回転してしまい、うまく刺さらない。第二次大戦中に壮烈な戦死を遂げた山本五十六海軍元帥が若き日、食後の腹減らし（この意味がいまだによくわからない）に仲間と手裏剣投げをしたという話を何かで読み、勝手に棒手裏剣でかなりの腕前だったに違いないと思っていた。しかし、元帥に教えてもらうわけにはいかない。

どうしたものかと思っていると、救いの神は意外なところから現れた。何と本物の忍者の末裔（まつえい）、初見良明氏だ。氏はにわかには時の人となっていた。新しく始まったアニメ『風のフジ丸』の最後に付いている「忍者千夜一夜」なるコーナーに出演し、いろいろな忍者の術を伝授してくれたのだ。どれも簡単に会得できるものではなかったが、棒手裏剣の投げ方だけはすぐに覚えられ、今でもうまく投げられる（でも、やってませんよ）。製薬会社がスポンサーなのに、内外から問題視する声が出なかったのは、いかにもこの時代らしい。

手裏剣投げ競争はその後も続いたが、だんだん近所の目も厳しくなって仲間も減り、うちの庭で僕一人でやるようになっていた。腕前の上達には代償も伴い、誰かにあげたり庭で無くしたりで、手裏剣は残り数枚になっていた。買い足そうと通販の広告を見たら、いつの間にか手裏剣が消えている。思いきって店に電話をしてみると、「どこかのお子さんがケガをしたので、販売できなくなりました」。

またかよ！ これで何度目だろう。いいと思っていた物が、同じパターンをたどって消えていく……。どっかのバカが人に投

げたり、周囲をよく確認せずに誤投したのだろう。下手なくせに、こういう時に限って悪いところに命中するものだ。

やがて『ウルトラQ』が始まると、忍者ブームは怪物物に取って代わられて徐々にしぼみ、僕の手裏剣も一枚も無くなった。和文タイプもとっくに壊れていた。10年以上も経ってアメリカで息を吹き返した忍者ブームも、一過性に終わった。でも、昔取った杵柄であのころ覚えたいくつかの術、例えば人混みをスムーズに抜ける動きなどは、今も応用している。

2B 弾とクラッカー 2B bomb & crackers

2B。

鉛筆の濃さではない。2B 弾ともいう、オモチャの爆弾（？）である。駄菓子屋などで10円か20円くらいで、数本単位で売っていた。ちょうどタバコくらいの長さで、タバコよりもふた回りほど細く、先端に火薬が詰まっている。ここに点火すると勢い良く火を噴き、すぐに黄色い煙をくゆらせて、この煙を噴いた段階からだと水中でも10秒前後で爆発した。

点火した2Bの下方を持って自由の女神のトーチのように掲げ、その二の腕を耳に当て、もう一方の手で片方の耳をふさいで爆発させるという度胸試しもよくやった。音の割には筒の先が裂ける程度だから、大した威力は無かったが、ケガをしたとかヤケドしたという話をよく耳にした。おそらく、ほぐして集めた火薬をピンに詰めたり、何本もまとめて爆発させたのだろう。男の子は誰でもこういうことをやってみたくなるものだ。僕たちもそうだ。だが、慎重に実験を重ねて限度を見極めていたから、周囲でケガをした者は誰もいなかった。手しゅ榴りゅう弾だんのように着火してから爆発するまでの時間差を利用して、いろいろな遊びを思いついたものだ。二手に分かれて2Bを投げ合う戦争ごっこも、そのパリエーションの一つだった。他人様の家に投げ込んで逃げる悪い遊びを楽しむ者もあった。こうしたことも重なって、2Bに対する風当たりが次第に強まり、うちの周辺でも2Bを置かなくなったり売り渋る店が出てきた。

例外は、パンや牛乳も売っているお菓子



屋もどきの1商店だった。店主の初老のオヤジは感じ悪かったが、うるさいことを言わずに何でも売ってくれるので子ども客が絶えなかった。

ところがある日、1で買った2Bが何度やっても着火しない。2Bはマッチと同様、箱の横で擦ればすぐに着火する。こんなことは初めてだ。「湿ってんじゃないのか?」。何度も擦っているうちに、点火薬が無くなりかけている。皆で顔を見合わせた。嫌な顔をされるのがわかってはいても、店に言いに行くしかない。意を決して皆で店へ向かった。「ああ、今度からマッチで火を点けなきゃならなくなったんだ。名前も変わったよ。見てみな」

本当だ。いつの間にか、クラッカーになっている。だったら、早く言えよ!「こっちゃんも、変わったよ」。オヤジは目の前のかんしゃく玉（地面などの固いところにたたきつけるとパンツ!と破裂する）を指差した。10粒ぐらい入った見慣れた袋に、白い字で「クラッカーボール」とある。「何でこうなったんですか?」「さあね」

オヤジは、それだけ言うとお奥へ引っ込んでしまった。僕たちは空き地へ取って返し、さっそく試してみた。店のすぐ目の前の駐車場でやりたかったが、またオヤジに文句を言われてもかなわない。マッチで点火すると、2Bと同じ経過をたどって爆発した。大方、マッチと2Bと一緒にポケットに入れて、引火した事故でもあったのだろう。だが、そんなのは自分が悪い。火薬の量が減ったようでもなく、あまり意味のある改名とは思えなかった。クラッカーボールもかんしゃく玉とどこが違うのかまったくわからなかった。「いちいち面倒くせいな」「マッチだってもったいないよな」

マッチの残り火による火事だって起こり得る。高まりつつあった2Bへの批判をかわすための措置なのは明らかで、かんしゃく玉はその巻き添えを食ったのだろう。僕たちは憤懣（ふんまん）やるかたなかった。さらに怒りに火を注いだのは、ある意味



平玉

2Bより危険とも言える爆竹が狙そじょうに上らないことだった。爆竹はダイナマイトを小型化したような形の花火で、10本ほどが連なり、着火すると次々と火が移って機関銃のごとく連続して爆発する。中国ではお祭りの定番で、鼓膜が破れた、服に引火してヤケドしたといった事故が後を絶たず、度々自粛要請されている。僕も爆竹でケガをしたことがある。火薬類でケガしたのは、この一度だけだ。友人たちの何人かもそう言う。

2B騒ぎも収まったころ、2Bを真っ先に売らなくなったおばあさんの駄菓子屋で爆竹を見掛け、買い求めた。以前から売っていたのかもしれないが、目にしたのは初めてだった。僕は束をばらし、そのうちの1本に点火した。ところが、導火線の燃え方がテレビなどで見るよりもずっと早く、空中に投げる寸前に手の中で爆発した。耳鳴りがし、親指の先が少し裂けて焦げている！火薬の量は2Bと同じ0.1グラムとあるのに、種類が違うのか音も大きく威力もある。1本にばらした僕も悪いが、着火から爆発までの速さは2Bの比ではない。買ったままの状態で点火していたら、もっと大ケガをしたかもしれない。にもかかわらず、何の注意書きもなかったのだ。

流通量が少なかったのか、事故の話は聞かず、爆竹はその後も売られ続けた。運動会のスタートの合図に使われる銃の火薬をずっと小さくした平玉に至っては、火薬だけ集めて暴発した事故が続出したが、こちらもあまり問題にならなかった。僕もこれらで随分楽しんだ口だから、騒ぎにならず

に済んだことをむしろ喜んだ。しかし、2Bに対する扱い（クラッカーになってから急速に廃れていった）とのあまりの落差には不信感が募った。今でもそれは変わらず、同じようなことが何度もあったので、詳しい経緯を知りたいとさえ思う。それより、犠牲者が出るまでは知らん顔で、何か起こると上辺だけ取り繕って、本質的な対策を講じようとする日本の「伝統」と達観すべきなのだろうか？

銀玉鉄砲の王道

Toy gun

僕たちの年代では、少し上の世代の棒切れのチャンバラはやや廃れ、成長に合わせたように登場してきた「銀玉鉄砲」が男の子を虜（とりこ）にした。文字通り粘土や泥を固めて銀色に着色した玉を打ち出す、左右の型を張り合わせたプラスチック製の安価なおモチャだ。主に駄菓子屋や縁日で売られていた。現在でも、エアガンやガスガン用のプラスチックBB弾に変わっただけで、同じような鉄砲が存在する。その点で銀玉鉄砲は消えた物とは言えない。だが、両者には決定的な違いがある。

ある年代以上の人間が銀玉鉄砲を語る時、ウエイトは明らかに前半部分にあり、そこから諸々の原風景へと想いは広がってゆく。粘土や泥を丸めて作ったような不ぞろいさこそが、銀玉の最大の特徴、らしさだった。なかには楕円に近い物も混じっていた。日本のお家芸である家内工業でしこしこ作っている様子が目に浮かび、ホッチキス玉の箱ほどの、カッコいい図柄が印刷された外箱（透明のビニール袋入りもあった）とのギャップもはなはだしい。まさに「弾」よりも「玉」のほうがふさわしかった。

時折、気まぐれに金色に着色されていることもあり、「あっ、○玉だ！」と品の悪いジョークを飛ばす奴が必ずいた。開けてみるまでは銀か金かはわからず、作り手がこうしたリアクションを予想して楽しんでるんじゃないかとさえ思った。数十発入って5円の箱には、そうしたいろいろな楽しさが詰まっていたが、固い所に当たれば砕け散り、拾い損なった玉はすぐに土に帰るというかなさも併せ持っていた。大量生産のプラスチック製のBB弾では、このように作った人の顔や思いはけっして見えて



セキデンオートマチック

はこない。

*

鉄砲本体の方も作動不良の物に当たることがあり、買う際に2、3回引き鉄を引いて試射してみる作業が欠かせなかった。気の利く店では、店主のおばさんがこれやっから渡してくれた。鉄砲上部の小さなふたをスライドさせて玉を入れると、引き鉄を引くごとにスプリングが伸縮して、玉が10メートルぐらい飛ぶ。玉が機関部に落ちていなければ発射できないため、カッコつけて転がりながら撃ったりすると玉が出てこない。残弾が少なくなれば、銃を振って機関部に落とし込む必要があった。

本体は50円のスタンダード・タイプと30円の小型の2種に大別され、前者は複数の製造メーカーがあったようだ。時期によって多少デザインの変更があったが、特定の銃を模していない「鉄砲の最大公約数」のようないい加減な形と、銃口部分に接着用のネジが貫通し、その下から玉が出るという構造は一貫していた。こちらと同じ値段で銀や金メッキの物が入荷してくることがあった。小型の方は黒一色だったが、あすき色の握り部分が目立ち、全体に凝ったデザインだった。ドイツの「モーゼルHsc」という銃をかなり正確にスケールダウンさせた物で、リアルな外観にはちゃんと刻印もされ、作り手の思い入れを感じた。後にこの銃がモデルガンになった時は、何千円もするのに銀玉鉄砲に見えて仕方なかった。左右の型の固定も、確か接着剤のみでネジを用いていなかった。玉も銃口から飛び出し、引き鉄もスタンダード・タイプの「ボンヨッ」という粘っこい感触に対し、「カチッ」と切れ味が良く、飛び方も少し違った。だいが後には、巻き玉鉄砲（本項35ページ・マテルの項参照）の機能を組み込んだ、発射音（パチンッという程度だが）も同時に楽しめるデラックス版が登場し、確か値段は100円だった。

だが、銀玉鉄砲はどれもある程度使うと必ず壊れて買い換えねばならない。デラッ

クス版は機構が複雑なうえに、粗悪な火薬がサビを誘発して早くガタがきた。そのため、僕もみんなも一度で懲りて、人気商品とはならなかった。すぐに壊れるのだから銃のクセをつかむどころではなく、まばらな形の玉は真っ直ぐには飛ばず、2発まとめて出てくることもあった。特に銃口の下部から玉が出るスタンダード・タイプの照準装置は、お飾り以外の何物でもなかった。

*

そこそ腕前に自信はあったが、銀玉の外箱を標的にして遊ぶのは、鍋料理を一人でつつくような味気なさがある。数人あるいはいくつかのグループで撃ち合う「銀玉ごっこ」が最もマッチした遊び方、王道だった。銀玉鉄砲はパチンコと並ぶ当時の男の子の必須アイテム。声を掛ければすぐに何人かが集まってきた。自然発生的にやろうということになる場合もあり、その時は現地で銃を調達した。少し離れた恵比寿や麻布の友人宅の周辺にも駄菓子屋があって、銀玉鉄砲は容易に手にすることができた。

ある時はうちや友達の家で、またある時は空き地や公園で。広ければ広いほど面白さが増し、移動しながら町全体を使った市街戦になることも珍しくなかった。明確なルールは無かったが、顔や動物は狙わない、流れ弾には細心の注意を払って他人に迷惑を掛けない、といったいくつかの紳士協定は存在した。

しかし、夢中になってくると片手で顔を覆って至近距離で滅茶（めちゃ）苦茶（くちゃ）に撃ち合ったり、団地や社宅に入り込むなど、紳士協定はしばしば破られた。逆に、銀玉ごっこに熱中する勤労青年とおぼしき数人が公園に乱入してきたこともあった。思いがけない珍入者に最初は面食らったが、こんなに無邪気で楽しそうな表情の大人は見たことが無かった。青空の下で風の匂いをかぎ、相手の動向に耳をすませながらの（鉄砲を振るカラカラという音で、残弾の少ないことも察知できた）町歩きは、心底楽しいものだった。通ったことのない小路を知り、普段は何気なく通り過ぎていた風景に目をこらすことで、はからずも町の全体像も把握できた。長い時間を共に過ごすことで互いの友情も深まり、スポーツを除けばこれほど充実感を得られるものは他に無かった。テレビゲームなんかよりよっぽど健康的だ。

多少の脱線にも、大方の大人は目をつぶってくれたが、1度だけとんでもないことがあった。クラスメートのSらと銀玉ごっこに行く途中、狭い道を猛スピードで突っ込んできた赤い郵便自動車に引っ掛けられそうになった。

「バカ野郎！」

いつもは運動神経が鈍くて動作ののろいSが、珍しくポケットから素早く取り出した銀玉鉄砲を反射的に1発お見舞いした。すると、郵便車が急停車しバックしてきた。「危ないだろ！ 事故が起きたらどうするんだ！」過激派崩れみたいな、無精ひげを生やした長髪のおっさんに近い兄ちゃんは、すごい形相で怒鳴った。危ないのはお前の方だろ！このころは親方日の丸的なところにこういうのが時折いて、よく客とトラブルを起こしていた。それにしてもこいつのひどさは超度級だ。

男は「俺は空手をやっているから、お前の頭なんかグチャグチャだぞ」と、脅し文句を吐いた。子ども相手に、あまりに大人気ない暴言である。Sはあまりの剣幕に気押され、犬のフンを踏ん付けているのも気付かずにじっと耐えていた。だが、日頃からかわれることに慣れているSは打たれ強い。すぐに元の調子に戻って、いつものように銀玉ごっこに興じた。しかし、このころから交通量が激増する一方で空き地は減り続け、僕たちも何となく銀玉鉄砲と縁遠くなっていった。歳の離れた末弟のころには、銀は銀でも玉はプラスチック製の均一な物に変わり、『ルパン3世』などの影響で「ワルサーP38」や「ルガーP08」といった特定の銃を模した鉄砲が主流となっていたようだ。その後は前述の通りBB弾になり、公園などでかつての僕たちのような子どもたちや、赤い弾を見掛けた。

近年はほとんどご無沙汰だが、先般たまたま立ち寄ったデパートの駄菓子コーナーには、ワルサーP38が健在だった。もっとも、コーナーには大人の方が多く、まばらな子どもたちは菓子類に集中していた。売られた鉄砲はどこで使われるのか不思議に思いながら、何十年ぶりかで手にとって引き鉄を引くと、懐かしい小型モーゼルのカチツという感触だった。百数十円と今の方がずっと割安だが、もちろん外国製。日本製はとくに絶滅している。銀玉を作っていた人たちのほとんども、引退が鬼籍に入っている

だろう。公園になだれ込んできたあのお兄さんたちも、どうしているのだろうか？

ガスガンを使うサバイバルゲームは年齢層が高いそうで、銀玉ごっこに熱中した世代が多く含まれているのは容易に想像できる。僕も機会を見つけて、やってみたい。そうしたら、あの時のお兄さんたちにどこかで逢えるような気がする。

輝くマテル

Mattel 's world

アメリカの玩具会社マテルといえば、女性にはバービー人形、男性にはG・Iジョー人形、40、いや50代以上ならプラスチック製の鉄砲類が感慨深かろう。石原裕次郎らの日活無国籍アクション映画や、西部劇などの外画ドラマが全盛を極めていた当時、ちょっとしたガンブームが起こり、マテルの鉄砲は垂涎（すいぜん）の的だった。日本にも玩具の鉄砲はあったが、文字通り子どもだましの代物で、よく壊れもした。それに比べてマテルの方はかなり本格的で壊れにくく、箱からして豪華だった。映画雑誌にも広告が載り、精巧な金属製のモデルガンがまだ無かったこともあって、大人にも愛好者が多かった。亡くなった古今亭志ん朝が、何種類ものマテルを手に入れている写真も見たことがある。

西部劇の銃を模したファンナーという回転式の拳銃とウィンチェスター・ライフル。刑事物によく出てくる銃身の短いスナブノーズ38。38は握りや細部がそれらしい現代風の物に変えてあったが、本体はファンナーと同じ。左右をモナカのように張り



スナブノーズ38



合わせてネジ留めし、撃鉄や引き鉄などの主要パーツだけは金属で、銀メッキが施されていた。

いずれも、スプリングが内蔵された真鍮(しんちゅう)の葉莢(やつきょう)に、左右にフックの付いたプラスチックのグレーの弾頭をはめ込み、引き鉄を引くと弾倉が回転して撃鉄がたたき、弾頭が数メートル(広告には10メートルとあった)飛んだ。6連発で、葉莢の底部に緑色の専用紙火薬を張れば、撃発音(といってもパン、というしょぼい音だ)も同時に楽しめた。拳銃の方は写真で見るとは似て非なる外観だったが、ウィンチェスターの方はかなり似ていた。銃床などの木製部分には茶色のプラスチックが使われ、木目の凹凸まであって、子どもの背丈に合わせた長さが絶妙だった。

ウィンチェスターと軍用のトミーガン機関銃は、巻き玉と呼ばれるセロハンテープ状の紙火薬を使うようになっていて、機関銃だけは弾が出なかった。ボルトを引き、ダッ、ダッ、ダッ、という感触と撃発音が味わえるだけだ。その代わりに、黒か迷彩色のどちらかを選べた。全種欲しかったが、手が込んでいる分、値が張ってとても無理。熟慮の末、祖父にねだって、西部劇にも刑事・探偵物にも対応できるよう38とウィンチェスターを時期をずらして買ってもらった。38にはビニール製のホルスターに加え、M・D・S(Matel Detective Squad=マテル特捜隊)と印刷された身分証明書が付いていたのも大きかった。押韻と写真を貼るスペースまであり、どうせ子どもの物だからと手抜きをしない姿勢がうれしく感心もした。「メッキが曇るし、サビの原因にもなるから火薬は使わない方がいいよ」。購入したアメ横のおじさんは親切に言ってくれたが、音がしなければ撃った気がしない。それに、せっかくマテルを買った意味も無い。ただ、近所の駄菓子屋でも手に入る国産の赤い紙火薬は絶対に使わなかった。割安ではあったが、裏に糊の付いた物が無く、いちいちセロハンテープで張らねばな

らなかったし、何より粗悪な気がしてサビがひどくなるように思えたからだ(成分は大して変わらなかったろう)。

そんな訳で、なるべく火薬は節約し、撃つ時は気合を入れて引き鉄を引いた。ちょうど、大男がウィンチェスターを連射するテレビ西部劇『ライフルマン』(声を演じたのは後に「水戸黄門」の風車の弥七で有名になる中谷一郎だ)が大人気で、よくその真似をして、この時ばかりは景気良くぶっ放した。本国でも同様だったらしく、レバーに連射用の可倒式の爪が付いていて、これを上げれば誰でも簡単に『ライフルマン』のような連射ができた。ところが、うちへ来る友達がみんなこれをやるおかげで、1年足らずで壊れてしまった。一方、38は多少手荒く扱ってもビクともせず、長く僕を楽しませてくれた。山口瞳原作の『江分利満氏の優雅な生活』(1963)に、38に熱中するちょうど僕と同じ年頃の少年が出てくるが、まさにあれは僕だ。それほど愛着があった38を、タイムカプセルのつもりだったのか、ある日僕は庭に埋めてしまった。箱にも入れず、油紙に包んだだけで。この時の心境はいまだに自分でもよくわからない。ただ、勉強に専念しようとかの殊勝な理由ではなかったことだけは確かだ。

やがて、金属製のモデルガンが出始めるとマテルは見向きされなくなって店頭から消え、製造中止になったと聞いた。

*

それからすっかり忘れていたが、10年ぐらいいして突然庭に埋めた38を思い出し、すぐに掘り返してみた。間もなく、握りが割れ、メッキも剥はげ落ちた無残な38が姿を現した。悪いことをしたな、と愛しさも込めてなでながら、反射的に引き鉄を引いた。ん? 何と作動するではないか! 洗面所で泥を洗い落とし油を注してやると、覚えていた感触が甦よみがえった。何回か引き鉄を引くごとに調子が戻り、弾倉の回転も滑らかになった。かくも、昔のアメリカ製品は頑丈だったのだ。この38と身分証、それに壊れたウィンチェスターは、今も手元にある。大切な宝物として。

黒かった 金属製のモデルガン

Metallic cap gun

マテルの項で触れたように、昭和30年



代中葉に西部劇ブーム、ガンブームが起こり、37年(1962)には国産初の金属製モデルガンが登場した。ちなみにこのころまでは、映画やテレビの撮影用には、何と警察から実銃を借りることができた。黒澤明の『野良犬』(1949)や赤木圭一郎の遺作『紅の拳銃』(1961)などにその姿を留めている。もっともこれは例外的な措置で、実銃が借りられるのは主役クラス用のせいぜい1、2挺(ちょう)。ほとんどは、銃身にセットした花火を内部の電池で発火させる物が使われていた。真鍮(しんちゅう)製ではあったが、それらしい形を模しただけで愛好者を満足させるような代物ではなく、もちろん市販もされてはいなかった。

実銃に近い外観と作動が楽しめるモデルガンの登場は、愛好者にとっては朗報だった。意外にもアメリカを始め実銃が所持できる国々では、マテルのようなオモチャであっても、このような中間に位置する物は無いのだそう。銃器規制が世界一厳しい日本(最近は銃器犯罪が急増している)ならでは物と言え、ディスプレイ用や発火しないシーンの小道具用として、後にアメリカへも輸出されて重宝がられている。

さっそく僕も、初期のワルサーVPというモデルを祖父に買ってもらうことになった。ただ、予期せぬトラブルでだいぶ遅れた。買いに行く約束した日に祖父が都合が悪いと言出し、怒った僕がコタツから立ち上がった勢いで、みそ汁がこぼれて祖父に引っ掛かった。これがわざとやったということになって、無期延期。ようやく手にできたのは、季節も変わったゴールデンウィークの初日だった。

祖父の機嫌は直っていたが同行はせず、アメ横に買い物があるという叔父とその友人と一緒に、車で出掛けた。マテルの時以来のアメ横は相変わらず人があふれ、終戦直後の闇市そのものだった。東京が大きく変わっても、ここだけは時間が止まったままだ。拳銃という危なげなイメージともよ

くマッチしていて、僕はワクワクしてきた。

モデルガン売っている店は、ガード下のアーケードの一角にあった。分解図の印刷されたオレンジと白のツートンの箱に入った銃は、黒くずっしりと重かった。引き鉄を引くとスライドがガチャと動いて、重厚な手応えがある。プラスチック製の回転式マテルとはまったく違う、味わたことのない快い感触だ。これに決めた！僕はすっかり気に入った。

車に戻る途中、どこかで見たような人とすれ違い、叔父たちが「今のアイ・ジョージじゃないか？」と顔を見合わせた。当時人気絶頂で、NHK 紅白歌合戦にも出ていたハーフの歌手だ。がっしりした後姿は確かにその人だったが、意外と小柄だ。僕はアイ・ジョージもモデルガンを買いに来たのだと勝手に想像を膨らませ、ニヤニヤしながら帰途に着いた。帰宅すると叔父に促され、祖父にいつもより懇ろに礼を言っただけじゃあないのか？」僕も初めはそう思ったが、そんな危ない物を子どもには持たせられない、とは考えず面白がるのが祖父だ。

それから少しして、発火モデルがあったことを知り「しまった！」と思った。しかし、これは 1,000 円も高い 3,000 円を超える値段だったから、買ってもらえたかどうかは疑わしい。僕はそう考えて自分を納得させたが、不発火のモデルガンでも結構楽しめた。真鍮のカートリッジをマガジンに入れて差し込み、引き鉄を引けばスライドが作動して横に飛び出す。回転式のマテルとは異なる醍醐味（だいごみ）だった。後で買い足した黒い皮製のホルスターに入れてベルトに付けたりもして、存分に楽しんだ。友人たちや親戚のお兄さんらにも好評で、みんな興味津々だった。

翌年には日本やアメリカの刑事用の、マテルに似た銃身の短い S & W チーフスペシャル、「007」の愛銃ワルサー PPK が相次いで発売。かなり売れたそうで、友人の何人かも買っていた。いずれも銃身の一部が空いていて（改造防止のための詰め物はしてある）火薬も使え、撃つと煙と火が吹き出す。VP は実銃の存在しない架空のモデルだったが、これら以降の物はすべて本物がある。次第に種類も増え、独自の発展を遂げていった。僕も食指が動いた反面、VP が壊れてしまったことでしばらくは遠

のいていた。

しかし、スパイブームに乗ったアメリカのドラマ『0011 ナポレオン・ソロ』が始まり、主人公たちの使うワルサー P38 アンクルタイプがモデルガンとなって、親友の H が凝りだしてから、再び僕の虫が騒ぎ出した。マカロニウェスタンの流行もあって第 2 次ガンブームが起き、H と徐々に訪れたアメ横は、モデルガン売っている店も子どもたちも急増していた。だが、どれも 2 ~ 3,000 円以上はして、子どもにはおいそれと手が出ない。いきおい見るだけとなって、M 商店では店主のじいさまが「お前らあるもん買ってけ！売ってやるから！」と怒鳴ったりしていた。

H に連れて行かれた店はビルの 3 階にあり、店頭には 007 役のショーン・コネリーが PPK を構えたパネルがあった。日本を舞台にした『007 は二度死ぬ』（1967）のロケでこのモデルガンが使われたとかで、店名も「ポンドショップ」だった。

問題のアンクルタイプは確か 3,800 円。別売のストック、サイレンサー、スコープなどと組み合わせればカービンのようになる夢多き銃ながら、全部そろえれば約 1 万円！僕たちは互いに別の付属品を買い足して、貸し借りする裏技を考えついた。まず本体を買わねばならなかったが、金がなかたまま、H に先を越された。それから下見を兼ねた H とのアメ横通いが始まり、御徒町駅中のコーヒ - 店で 40 円のホットドッグを食べるのも楽しみだった。吉田元総理の国葬の日も、学校が半ドンになったので、物見遊山で参列した帰りにアメ横に寄った。

付属品はだんだんとそろっていったが、本体が度々壊れるのには参った。モデルガンは強度の弱い亜鉛合金ダイキャスト製で、数年で酸化して半分以下の強度になり、火薬を使用すればさらに早く劣化する。改造防止の点からは好ましくとも、たまったものではない。また、作動不良や不発も多くて次第に幻滅し、ついには主要パーツが破損して計画は頓挫した。それでも、自殺行為にも等しい改造を試みる輩や悪用は後を絶たず、アンクルタイプを買う際には住民票を提出せねばならなかった。大物芸能人やスポーツ選手が拳銃不法所持で相次いで摘発されたのも災いし、モデルガンに対する逆風も吹き始める。昭和 46 年（1971）



アメ横のモデルガンショップ

には法改正され、銃口を完全閉鎖し、黄色か白に塗らなければ販売・所持ができなくなった。黒い金属製モデルガンの時代は 10 年にも満たなかった。映画用も対象になり、ヒーロー物で悪漢が白いテープを巻いた銃を持っていたのを見た時は笑い転げてしまった。しかし、現実の世界は笑ってなどいられなかった。業者も芸能界も大混乱に陥り、プラスチック製の物が定着するまでその余波は続く。金メッキを施されて魅力の半減した金属のモデルガンは、6 年後にさらに法規制され、プラスチック製のモデルガンに加え、BB 弾の出るエアガン、ガスガンが主流となっていった。

かつては数軒の専門店のあったモデルガンのメッカ、アメ横も一軒を残すのみだ。昔のままの風景の御徒町の中で、これだけは時の流れを実感させる。

著者：千蒙豹一郎
作家・評論家。日本刑法学会、ベツト法学会会員。
著書に『法律社会の歩き方』（丸善）『スクリーンを横切った猫たち』（ワイス出版）の他、『東京新聞』、『猫生活』（緑書房）『ミステリマガジン』（早川書房）をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。

昭和30年代の
僕と日本の少年時代
備忘録 for iPhone
千蒙豹一郎

あの日、未来は明るかった——
懐かしくもほろこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

クレーン先や舟の轟音、アトムや鉄腕アトムに熱し、カチューシャ、ターナー、パンバーガーショップ
最近に刊行された『昭和30年代』は、その中でも、最も注目すべき作品だ。著者の千蒙豹一郎は、
昭和30年代、その時代を生き抜いた少年の視点から、その時代の空気、情熱、そして、その時代の
“庶民生活”を、ほろこしくも、リアルに日本の歴史を振り返る。必読作。

当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて
本文：108 ページ / 映像：2 分 23 秒
2012 年 9 月 ミリアムワード(株) 発行
価格：1,980 円 (税込)
株式会社ユニワールド
東京都世田谷区松原 2-34-9
TEL.03-5376-7233
FAX.03-5376-7246
info@uni-w.com